

【エッセンシャル版】

厚生芸術の萌芽的研究

少子高齢化社会における社会厚生のための

熱学思想と創造的資本論の接続による実践美学試論

Welfare Practical Aesthetics

;connecting the Capital of Creativity and the Thermal Dynamics

for the Social Welfare in fewer children and more aged society in 21st century.

山本 和弘

YAMAMOTO, Kazuhiro

Brand new concept “Welfare Practical Aesthetics” is named after “Welfare Economics” and critical against the old static art theories including aesthetics, art history, art criticism and art theories like sociology and psychology. Especially Welfare Practical Aesthetics criticize the autonomy of art, which is thought as a myth, analyze the intrinsic heteronomy between art and other scientific disciplines and life-wide phenomena. This new art theory is made for being ready for fewer children and more aged society in 21st century. Creativity is most important keyword to cultivate depressed economy, because creativity is an unlimited capital which everybody a priori possesses. As a proceeding example we discuss the art and philosophy of Joseph Beuys. Finally we propose the necessity of improving curriculums of art university as to connect the creativity of young people to the social opportunities.

Keywords: 厚生芸術、芸術、教育、福祉、医療、環境、熱学、ボイス

緒言

本研究の表題とした《厚生芸術》とは経済学の一分野である厚生経済学から借用したまったく新しい概念である。厚生芸術とは芸術における、芸術による社会の「最適」とそれを目指すための「政策」を提言し、最広義の芸術家の「雇用」を探求する広範な下部領域を擁する研究分野である。それは従来の美学・芸術学を批判的に乗り越え、現実社会へ貢献しうる芸術のあり方を探求する21世紀の学である。(略)複数の個人が芸術活動の結果得た芸術 (art) を厚生 (welfare) ととらえ、その社会的厚生を最大化することを厚生芸術はひとつの課題とする。

1. 芸術の効用再考—芸術と諸科学の分岐と再融合の要請

科学技術と洗練技術 (fine art) の分岐は長期的視野に立てば、確実に同根であることがわかる。それぞれの道は前者が今日において社会の広義の福祉のために生かされているのに対して、後者は社会の福祉とは異なる局所でのみ生かされてきたといえるだろう。この意味において、芸術すなわち洗練技術はその概念の発

明段階において、その効用から福祉的なものを積極的に除外していたということが出来る。

(1) 芸術神話の終末

芸術がわからないものとなって卓越化に利用されることについては、大衆の逆襲ともいべき現象が今日、世界的にみられる。平易で親しみやすいという一種のイデオロギーに支配されているからである。ときおり高度な批評性をもった作品が現れても大衆化された芸術受容システムの中でそれらはやはり苦境に立たざるをえない。その一方で芸術の非大衆性は芸術がわからない(ものになっている)ことを批判すること自体があたかも恥であるかのようなイデオロギーも生み出した。私は芸術がわからない。これは私のせいではなく、芸術のせいである、と正面切って論陣をはること自体がタブー視されてきた観がある。それを正面切って批判した二つの例を挙げる。ひとつはドイツ文学研究の松宮秀治、他は芸術経済学のハンス・アビングである。

例えば「社会のすべての人びとが芸術について誤った情報を与えられる傾向にある(テーゼ39)」ということは芸術に無関心な人びとにも確実に当てはまり、「美的価値の確立において決定的なことは文化資本の所有であり、市場価値の確立において重要なことは経済資本の所有である(テーゼ17)」は特に芸術で生活する職業者にとって重要である。しかし、前者についての無知は一般生活を営む人びとにとっては罪のない無知であるが、後者がもし芸術系大学で若い学生を指導する立場にある人間にあてはまる場合は無知ではすまされない罪悪となる。実際には後者の事例がほとんどであるために、厚生芸術がまさに時代から要請される理由でもある。飢餓と貧困、そしてモンスター化する芸術の経済は同じ構造にあることを私たちはみな至急確認しておかなければならない。

(2) 芸術の自律性と他律性

芸術の自律性という考え方は、今日からみれば——すでに疑念は芽生えているものの——考察のパスペクティブをやや長期にとれば懐疑的にならざるをえないであろう。結論的にいえば、芸術が自律的であることによって、芸術が本来性としてもっていた(あるいは期待されていた)効用が捨象され、きわめて静的な

ものとして他方面から介入されやすいものになってしまったからである。介入されやすいものというのは、いうまでもなく「卓越性」や「投機性」などの一部の社会階層／経済特権層によって利用されながらも自ら対抗的言説をもちあわせなくなってしまったということである。

芸術における美の純化、あるいは形式性のみを普遍妥当性の基盤とする思想はこの科学と技術との関係と平行である。もっとも芸術は科学技術と違って負の遺産(廃棄物、環境破壊など)をもたらさなかったように思われるかもしれない。しかし、事態は逆であろう。科学技術の暴走に対して批評を行うことこそ芸術の重要な役割、すなわち効能が自律性の美名のもとに隠蔽されてきたからである。18世紀の産業革命以降、科学技術の独走を批判しうる力を従来の宗教が失っていたことはいうまでもない。このような事態は見方を変えれば、社会や歴史における病を診断する医療的視点の欠如ともいえる。社会は良い方向に機械的・自動的に発展・進歩するものではなく、病むことを私たちは見過ごしてきた。それも長い間にわたって。社会への批評装置としての芸術の機能が投閑視されてきたのである。

ハンス・アビングは職業芸術家の養成機関であり、職業規制を行ってきた芸術アカデミーの権威が衰えた19世紀に職業規制が緩和されたのに応じて次第に芸術家が自律的であること標榜せざるをえなくなってきたことを指摘している。しかし、そのことによって「誰もが芸術家になれるようになった。そして、芸術家の数は増え、収入は低くなってきたのである」とその貧困の理由が自律性の強制にあることを指摘している。

*

芸術の学はこの温存された構造そのものを批評することはなかった。すなわち、ある重要な視点を制作者も研究者も欠いたまま芸術を問うてきた。こうしてマクロな視点を見失ってきたのである。

(3) ミクロ芸術論とマクロ芸術論

ミクロ芸術とマクロ芸術とは従来の芸術論にはない新たな視点である。(略)ほとんど需要がないにもかかわらず、大量の芸術供給者が再生産されるこの不健全な状況は、経済学的に不合理なのではなく、芸術の概

念そのものの誤りに起因している。

*

厚生芸術はこの言明を科学と芸術の未分化状態の資源として活用したい。このような言明から物理学的真理を減じた場合の残余が神秘とされるわけであるが、この非科学的残余は創造的資源として保持されてよい。光（と影）を主要契機としてきた従来のマイクロ芸術論に対して、熱（そして電磁）現象を包括するマクロ芸術論を厚生芸術は採用していく。なぜなら、人間の生存にとって光学現象よりも熱学現象の方が欠くべからざるものであるからである。そのことは現在の産業構造を俯瞰すれば一目瞭然である。視覚メディア（産業）はようやく熱学メディア（産業）に追い付くかのように発展してきた。

2. 厚生芸術 = 芸術(教育 + 医療福祉 + 環境) あるいは創造的資本論

厚生芸術 = 芸術（教育 + 医療福祉 + 環境）という等式は二つの意味をもっている。ひとつは21世紀以降の芸術の効用を共有し、社会厚生を向上させるためには、国内のみならず世界共通の政治課題である教育、医療福祉、環境と芸術が手を携えていくことが必要であるということ。このことはすでに萌芽的に教育現場における芸術志望者の相対的増大、医療現場における芸術関与の増大、環境問題における芸術から解法提案などにみられるが、いまだ体系的段階にはほど遠い。具体的には大学進学人口の減少にもかかわらず芸術系志望者が増大（世界的傾向）する一方、そこでの芸術観は18世紀から20世紀までのマイクロ芸術学の射程に限られた狭量なもので、卒業後はごく一部が芸術界にろうじて残るも、苦難の道を歩む。そして、大多数の芸術系大学卒業者は芸術的創造とは無縁の非創造的業務に従事している。その最大の要因は芸術系大学で教育する人間が芸術神話の申し子であり、芸術神話内存在である自己に気付かず、その分身を社会と隔絶したまま再生産している硬化した構造にある。しかし、この事態もまた悪意のある誰かがレントシークしたのではなく、神話内で無意識的に出来た出来事である。しかし、この無知を放置するほど時代は安穏としてはいられない。

この因数分解を含む等式はヨーゼフ・ボイスの様々な等式に由来している。この因数にあたる芸術（カッコ外の芸術）は前節の議論を受けた視覚（光）に関する従来の芸術である。それに対してカッコ内の教育、医療福祉、環境は熱に関するものである。いわば熱学的芸術である。もっともこれは芸術としては成立しなかった。よって、厚生芸術とは従来の光学的芸術と熱学的芸術をかけ合わせたものとなる。これまでみてきたように熱的効用は科学の発展、そして産業革命によって私たちの生に密接に関わってきたにもかかわらず、芸術が顧みてこなかったものである。後者が生活効用的であるとすれば、前者は生活無効的であったということになるだろう。芸術が無用なものとしてその卓越性を高めたことの背景には熱にかかわることなく、光にのみかかわってきたことがある。教育、医療福祉、環境は、例えば、世界中の議会政治家が選挙演説で力説する重点アジェンダである。また、ボイスが資本ととらえる私たちの創造性が最も発揮されるのが期待される分野である。すなわち、議会政治家と非議会政治家の目的は一致している。いうまでもなく、教育、医療福祉、環境は少子高齢化社会を迎え、さらに加速する時代に生きる人間にとって重要な課題である。

(1) 芸術と教育

厚生経済学においては潜在能力という訳語の定着しているcapabilityは実はドイツ語のFähigkeitの訳語でもある。Fähigkeitはいうまでもなくボイスの語彙では資本（Kapital）であり、創造性(creativity)である。こうしてボイスの社会彫刻の理論は狭義の芸術における異端的位置づけから現代社会の最前線の課題を研究する学である厚生経済学と歩調を合わせていることになる。この厚生芸術における潜在能力の議論は貧困との連関を強く示唆する。

(略)

そもそも芸術系大学のとらえる芸術が先述のように光学に引き寄せられたそれであるとすれば、熱を根源的な要因ととらえ直す厚生芸術が資源と措定する創造性の一部にしかかかわっていないことになる。21世紀の社会が最も必要とする資源はレア・アースでも化石エネルギーでもなく、物的には無に等しい人的創造性である。もっとも日本の大学のどの専攻においても直

接関連する職業につくことはそう多くない。したがって、芸術だけが例外なわけではない。しかし、芸術は知識ではなく、創造性という無形の資源を開発するものである以上、開発途上の創造性の開花を職業に結びつけ、社会化する可能性を多く秘めていることになる。より正確を期するならば、芸術系大学における「ファインアート」を学んだ人間や近代化の過程で眠ってしまった創造性を覚醒しようとする人間は産業的に構造化された社会をよりよい方向へと人間を開放する可能性を秘めているのである。この開花途上の資源はいま芸術系大学においては残念ながら無駄にされることが多い。学生は創造力の効率的な開花の可能性を学ぶのではなく、創造性のひとつの可能態にすぎない狭義の芸術（技法）を学ぶだけで終わる消費者として利用されている（自己助成と内的報酬によって芸術に奉仕している）にすぎない、と言ったら言い過ぎであろうか。

さらに厚生芸術が提案するのはこれら芸術界外部のビジネス・シーンでの創造階級の台頭と芸術界内部での芸術系大学志望者の増大（にもかかわらず狭義の芸術家にはなれない競争的労働市場）との有意義な接続である。

*

現在のところ、芸術系大学で開発される創造性は実社会では余剰の能力と思われているかもしれないが、それこそが地球上の物的資源を浪費することなく人類が幸福に生き延びる可能性の源、すなわち生存資源なのである。芸術系大学の教員も学生も父兄も天才ならざるものはモラトリアム期間の遊戯であり、実社会で役立つことはないと思われている（あるいは顕示的消費者を楽しんでいる）が、創造性の開拓こそ人類の生存資源として活用されるべきものなのである。いうまでもなく、現在の芸術系のカリキュラムがこの時代の要請に答えるものではない。いたずらに需要のない作品制作をするのではなく、狭義の芸術家の事例研究や美学、美術史を掘るのではなく、より実学・実務と直結する創造的接点の開発・開拓および接続法の開拓が必要なのである。熱学を要請する分野、すなわち教育、医療福祉、環境との具体的接続が急がれる。

(2) 芸術と医療福祉

芸術と医療福祉は今日では別領域と考えられている。

しかし、芸術が芸術となる以前（18世紀のパウムガルテン、ヴィンケルマンによる芸術概念の生産）はこれらの領域は不可分に結びついてたと推測される。「実際、ラテン語の動詞medicareは〈治療する〉〈薬草を与える〉だけではなく、〈魔術をもちいる〉の意味を有し、名詞medicusは呪術的な意味をともなう治療者（healer）を指している」。これと関連してボイスは「医療」をドイツ語ではHeil-kunstという述べ、今日において芸術という意味に転じてしまった技術Kunstの多義性を語っている。

これもまたボイスの熱彫刻という概念によって医学と芸術が厚生芸術の中で接続されるのである。

*

他方、名古屋造形大学の《やさしい美術プロジェクト》（ディレクター：高橋伸行）は既存の作品、すなわち不特定の展示を前提に制作された作品ではなく、はじめから病院という医療現場、空間を前提に病院の医師、看護師、事務スタッフとの数多くの議論を経て制作された作品を病院内の各所に適切に配置するプロジェクトで、治療効果の最大限の発揮を意図したプロジェクトである。

3. ヨーゼフ・ボイスの厚生芸術的読解

（（1）救済の芸術、（2）十字形、は省略）

(3) 社会彫刻という名の厚生芸術

厚生芸術の輪郭をより鮮明にするために本節では、ボイスのいう社会彫刻をインサイダー（美術界部内者）とアウトサイダー（美術界部外者）という対立項を用いて考察する。前者は旧来制度内美術といってもよい。すべて内部の隠語によってしか通じることのない世界である。ボイスはいち早く芸術のこの閉鎖性と特権性に気づき、芸術の改革に着手する。しかし、本節ではボイスの思想に深入りすることなく、より一般的な芸術の変革必要性を論じることにする。

*

さて、制度内美術もアウトサイダー・アートもともに創造性をいわゆる視覚的造形性に限定してきたようである。小論は人間が本来的に装備していると仮定する創造性を単なる造形力ではなく、社会を前進させる創造性、すなわち資本として駆動させることによって、

個人の厚生を越えた社会全体の厚生へと貢献することを目指している。したがって、アウトサイダー・アートが実証するように歴史的な制度内美術を指導することなく、まったく自由自在に造形的能力を障がいがかかえた人びとが発揮できるという事実そのものが、私たちが生来備えた能力が創造性であることを証明するだけではなく、私たちが本来備えているはずの創造性がいつのまにか昏睡してしまっていることをも証明しているのである。これは退屈な労働、より歴史的にいえば苦しく過酷な労働が社会を不可避に支えた時代を踏まえてこそいえることであるが、労働が苦痛ではなく、創造する喜びと渾然となることを予期するものである。これは芸術側からの芸術的産業と産業側からの創造的産業との交差点を求めることにつながる。

ボイスは産業革命において熱思想を自然にもあてはめた歴史を反省し、熱思想を人間に適用しようとする。ボイスの資本論はこのようなかつて自然の収奪のために用いられた熱思想を人間のために用い直すことを狙ったものと考えられるのである。ボイスの拡張された芸術概念とも言い換えられる社会彫刻は物理学者が自然に働きかけた熱思想を私たちの創造性に働きかけるものである。すなわち、厚生芸術の淵源がここにある。

4. 芸術という労働市場

(1) アーティストの雇用

「創造性＝資本」という厚生芸術の先駆者としてのボイスの等式を踏まえるならば、創造性を資本として回転させ、それを増大させることが肝要である。ボイスは資本を金銭資本以上のものとして措定したが、私たちにとって重要なことは金銭資本とは別の創造性がある、と勘違いしてはならないことである。金銭資本と別の創造性ととらえることが後節で検討する「善意の搾取」の温床となるからである。

私たちはスミスを基盤にしたアピングの議論における、搾取議論の手薄さをマルクス経由で吟味し、ボイスの芸術資本論、ひいては私たちの創造的資本論へと橋渡しすることが必要なのである。

⇒芸術系大学における芸術家予備軍を健全な生産者とするための芸術経済学の講座を最低限開設しなければならない。その際、教員は芸術界の内部と外部双方

に通じたものでなければならない。

(2) 現代における芸術家の搾取

芸術は福祉社会の異端ではなく、福祉を向上させるための社会厚生の子である。宗教から芸術への改宗とともに芸術から社会への改宗もまた今求められている。

今日の芸術家が搾取される第一の原因は芸術神話の存在である。芸術家は自らの報酬を求める権利を表面的に放棄している態度をとるために、搾取する側も搾取される側が支払う内面的（非金銭的）報酬を勘定に入れるのである。こうしてバランスシートに芸術家の報酬という項目が計上されないまま、収支がプラスになるという事態が起こる。これは搾取する側の罪だけではなく、搾取される側の罪でもある。したがって、どこにも悪意をもった搾取者がいないにもかかわらず、善意の人びとだけであるにもかかわらず、搾取が起こる。もちろん、発表の場がない芸術家のために発表の場を提供するという善意は実際にはそのコストを計上しないという経済的悪意の裏返しにすぎない。

(3) 産業としての芸術、芸術という需要創出、そして芸術系大学の社会化

芸術は創造性という無形の資源であり、サービス産業以上の創造的産業となる必要があるのである。特定需要層のための、誇示に利用されるだけの芸術に終わりを告げなければならない。18世紀にできた芸術概念はその使命を一方においてはすでに終えている。貧困、飢餓、戦争、不況、病気などあらゆる社会の問題と創造的に連鎖していくことによってその創造性は発揮されるべき新次元を私たちは迎えているのである。

(略)

この渦中で剰余価値を芸術家の雇用に投入しているのが村上隆である。村上は会社を設立し、多くのスタッフを雇用する。その村上は1993年に東京藝術大学に提出した博士論文「美術における〈意味の無意味の意味〉をめぐる」(「博美第33号」)において次のように記している。(略) 村上はボイスの社会彫刻の理解者ではなく、その彫刻の理解者であったことは、この論文の最後の図版に《鹿のうえに輝く稲妻》(1958-1985)を掲げていることからそれとわかる。

結語

私たちみな創造性という資本をア・プリオリに所有しているというヨーゼフ・ボイスの仮説を採用するならば、それは以下の意味において資源のない日本における少子高齢化社会の大きな需要を創出しうる貴重な資源となる。

ボイスの創造性は直接的に熱力学を応用したものではないが、上に示した熱力学の法則は自然、すなわち無機物質にのみ妥当するものとして物理学は捉えていた。しかし、生という暖かさと死という冷たさの境界を生きる私たちにとっても熱は最も重要な要因であることは言を待たない。とすれば、熱力学の成果を熱存在、あるいは一種の熱機関である人間にも生かすことは十分に可能であろう。ましてや熱学は19世紀になって力学と結合し、仕事概念として捉えなおされているのである。(略さらに仕事はエネルギーと同等の物理量とも定義されている。したがって、熱機関としての私たちもまたその熱の量に応じて仕事をすると考えられる。いうまでもなく、厚生芸術の射程にある仕事は物理的労働である以前に仕事を発生させる熱を生み出すことである。その資源が創造性ととらえられるのである。

*

大学において実質的に単科大学である芸術系大学に経済、医療・福祉、環境などの専攻を交差させ芸術的創造性に接続させ、新たな需要をつくりだす。そのことによって、これまで芸術家予備軍の位置に留まっていた創造性は社会的に開花する準備が整った。

註

この【エッセンシャル版】は本編を約7分の1に圧縮したものである。本編希望の方は山本 noema@art.pref.tochigi.lg.jp まで請求されたい。

執筆者

山本 和弘
YAMAMOTO, Kazuhiro
デザイン工学部 映像学科
Design of School / Department of Media Arts
非常勤講師
Part-time Lecturer
栃木県立美術館
Tochigi Prefectural Museum of Fine Arts
特別学芸員
Senior Curator